

認知症初期集中支援チームの活動の現状と課題

○河端裕美¹⁾ 井上尚子¹⁾ 田中直子¹⁾ 美原盤¹⁾ 大塚彰太²⁾ 大塚綾²⁾ 木村聡²⁾
美原恵里²⁾

1)脳血管研究所附属美原記念病院

2)脳血管研究所附属介護老人保健施設アルボース

[はじめに]認知症施策推進総合戦略において、認知症の早期診断・早期対応のための体制整備として認知症初期集中支援チーム(チーム)の設置が求められている。チームには、認知機能低下が認められ、かつ適切な支援に繋がっていない人に対して介入し、集中的に支援していく役割がある。当財団は伊勢崎市よりチームの設置を委託され、平成28年9月より活動を開始した。今回、これまでの介入事例を振り返り、チームの現状と課題について検討したので報告する。

[対象および方法]対象は、平成28年9月から平成29年3月までにチームに介入依頼があった14事例とし、基本属性、受付から初回訪問までの所要日数、介入依頼理由、チームによる支援内容とその成果について調査した。

[結果]対象の属性は、男性4名、女性10名であり、平均年齢は 79.6 ± 7.7 歳であった。調査期間中に介入が終了した事例は2例であり、そのうちの1例は死亡によるものであった。受付からチーム初回訪問までの所要日数は 13.3 ± 4.6 日であり、介入依頼理由(複数選択)は、「臨床診断を受けていない」29.6%、「適切な介護保険サービスに結びついていない」29.6%、「継続的な医療を受けていない」18.5%、「医療・介護を受けていない」11.1%、「医療・介護を受けているがBPSDの対応に苦慮」11.1%であった。チームによる支援内容とその成果では、「介護サービスにつなげた」30.0%、「認知症専門医を紹介」20.0%、「通院再開・継続につなげた」20.0%、「診断につなげた」10.0%、「介護者へ認知症・対応を説明」10.0%であった。

[考察]チームによる支援は、医療機関への受診や介護サービスの利用など、医療と介護の隙間を埋める役割を担っていることが明らかになった。しかし、まだまだチームによる介入例は少なく、今後さらに活用されることが課題である。